

## 広島県総合計画審議会第2回小委員会 議事録

- 1 日 時 令和6年9月10日(火) 午前10時00分から12時00分まで
- 2 場 所 広島市中区基町10番52号  
広島県庁北館2階 第2会議室及びweb
- 3 出席委員 伊藤委員長、石原委員、上野由紀子委員、金澤委員、木下委員、  
牛来委員、佐渡委員、日高委員(web)
- 4 議 題 施策領域別フォローアップ
- 5 担当部署 広島県総務局経営企画チーム地方創生担当  
電話:(082)513-2396(ダイヤルイン)

### 6 会議の内容(議事要旨)

#### 【領域:子供・子育て】

(委員)

- ・ そもそも子供を生もうと思わない、或いは子供の数はこれ以上要らないという人の問題を解決する必要がある。国勢調査などから、片働きより共働きの家庭の方が子供の数が多いということが分かっている。女性がしっかり働けて、子育てするのに心配のない財政基盤のある家庭を増やすことが大事である。出産後にどれだけ支援があれば良いかだけでなく、子供を産みたいと思える家庭を増やすため、女性の就労のこととしっかり関連付けていただきたい。

(委員)

- ・ 「共育て」とあるが、その前の段階として、出生率を増やすためには、「共家事」というのも入れていただきたい。東京のほうでは男性の家事参加率が増えているので、出生率も上がっている。逆に韓国が一番出生率低いが、それは男性が一切家事をしないというものもある。共育て、とも家事はワンセットで考えていただきたい。

(委員)

- ・ 全体像として子育てをどう扱うかの目線合わせが必要ではないか。ライフサイクル全体を見た時に、「共育て」がキーになると考えている。私自身も東京と広島で子供を育てた経験があるが、広島に来て思ったのは、広島県の中学校・高校の教育レベルの高さと、女性の働きにくさを、東京の対比で極端に感じた。優秀な子が県外に行くのは応援すれば良いと思うが、就職や子育ての時期に、最初の転職の時にどれだけ広島に帰ってくるのを促進できるかが大事だと思っている。「共育ては広島」と思ってもらえれば、もっと転入を増やすことができる。広島は最低賃金も高く、全般的に収入は決して低くないが、片働きでなんとかしようと思うからきつくなっている。共働きで育てようと思えば理想的な県であると思う。生活費も抑えられるし、安

全で、中高の教育レベルも高い。共育てをやる上では、働き方改革をもっともっと断行すべきである。それをする上では、子育てと切り離して議論するのは無理。働き方改革は企業の競争力を高めるが、大胆なことをやろうとすると収益等の即効性が求められてしまう。それがなかなか示せないため、男性が無理すればよいという安きに流れる。このジレンマの突破を行政に期待したい。共育てをやることによって、子育てしやすい県になる。片育てでは育児者のストレスが高くなり、夫婦関係の悪化を招き、子供の居場所がなくなったり、虐待につながったりすることもある。それらを防止する上で、男性の育児家事参画を徹底的に行う。広島県の企業であれば17時に帰って、それ以降の仕事は家でやるとか、それを促進するためのPC購入の補助を出すとか、夕方以降の電力カットで企業のインセンティブをだすとか、子育てと働き方をセットで考えるといい。そうすることで貧困や虐待、DVも減るのではないか。子育て、働き方は完全にリンクしている。転出超過を解決する一番の策にもなりうるので、セットで考えていただきたい。

(委員)

- ・ ネットスラングで「子持ち様」というのがあるが、子供の体調不良、学校行事で休むと、周囲に影響を受ける人がいる。例えば九州電力などでは、育児休職取得者が所属する従業員に対して応援金を支給するような制度がある。ただ、それができるかどうかは企業次第であり、それを県がどのようにサポートしていくことができるのかがこれからの問題である。

(委員)

- ・ 今の話は大事な点で、しわ寄せを受けている人への対応として、お金で解決するパターンもあるが、もう1つの対応策として誰もしわ寄せを受けなくてよくするというのが理想であると思っている。みんなが早く帰るようになれば誰も文句を言うことがなくなる。私の経験になるが、カナダでは家に書斎があって、ご飯を家で食べてから、家で仕事をするというのがどの家でも当たり前だった。例えばそういうモデルを広島県が率先してやって全国に広めていくとか、県外の人が広島に帰ってきたい、転入したいと思えるような思い切った施策を、共育ての中で出来ないかと思っている。

(委員)

- ・ ネウボラなどについては出産の時に教わったが、子育ての時にならないと認知しないという問題があるのではないかと。働き方と子育てはリンクしている。企業で働けないからフリーランスをしているとか、やりたい仕事と子育てを両立できないとか、就職していないとダメなんだ、と劣等感を感じることがないようにしないといけない。フリーランスだからとか会社員だからとかではなく、働き方も子育ても選べるようになって欲しいと思う。現在、中山間では移住者が増えているが、子育ても楽しみたいし、仕事もしたいということで選ばれる人が多い。広島県が、子供も仕事も両方フォローできるようなところになれば良い。

(委員)

- ・ 広島に行ってみたい、広島に住んでいる高校生や大学生がここに残りたい、広島っていいなと思わせるような思い切った政策を見せることができると良い。その一つとして、共育てのよ

うに、社会、企業が一緒に子供を育ていく風土が出てくると良い。

- ・ もう1つは教育で、長期的に30年後までみるのであれば、乳幼児期から一貫した包括的性教育が大事だと考えている。人権、人との付き合い方、ジェンダー、自分や相手を大事にするとか、自分のライフデザインなど全てが入るようなものができるとう良い。さらに子育てや働き方に加えて女性のロールモデルを見せることで、自分たちも将来トップになれるように頑張りたい、となってくれば、日本のジェンダー問題も少しずつ解消するのではないか。

(委員)

- ・ 子育てには賛成であるが、具体的に何をするのか。そこのアイデア出しをしていかないと空論に終わってしまう。例えば、子育て支援では、ファミリーサポートセンターはあるけど、夕飯は食べさせてもらえないとか。病児育児室の整備とか、具体的な小さいところを詰めていく必要があるのではないか。

(委員)

- ・ 子育て以外でも、労働市場ではリスクリングの重要性が高まっているが、多くのサラリーマンには学びの時間がない。夜はリスクリングのための勉強の時間が確保できれば、次のチャレンジに繋がり、広島産業の活性化にもなるのではないか。
- ・ 「子育て」はキーワードとして良いが、仕事も家事も、全部やらないといけないという苦しさも感じてしまう。社会で出会う大人たちが苦しうだから、社会に出たくないと感じる子がいるように、子育てについても同じで、楽しい子育て社会のロールモデルを示していかないと、結婚もしないし家庭も持ちたくないとなってしまう。若い人はなかなかロールモデルを見つけにくいので、そこを積極的にアピールできると良い。

(委員長)

- ・ 2点ほど補足であるが、ある本の中で、育児休業をとった社員に対しては給料が全額保証されないため、その余った人件費を勤務している社員に還元すべきということが書いてあった。内閣府やこども家庭庁でも、そのような議論がされているようであり、こういうことも有り得るのかなと思った。
- ・ 合計特殊出生率は地域別に見ても意味はない。また、合計特殊出生率だけを見るべきではないという説がある。出生率と若い女性の比率は逆相関であり、若い女性が少ない地域は出生率が高くなっている。広島県は、15～49歳の女性人口は上から14番目で、人口シェアは12番目なのでやや低くなっている。であれば合計特殊出生率はもう少し高くてもいいが18位となっている。問題は、合計特殊出生率は女性だけを見ているところであり、有配偶者の出生率を比較すると、広島は16位で、東京都とほぼ一緒である。人口1,000人あたりの出生率は、広島県は13位、東京都は8位となる。福岡も一桁台となる。合計特殊出生率だけ見るのではなく、有配偶者率などにも目を向ける必要がある。広島県は1日に生まれる子供は49人しかいない。分娩ができる病院、診療所が減っている。広島県は子育て支援に熱心であり、希望出生率に近づいている、という評価もしてきたが、別の視点から見ると問題があるということに注意が必要だ。

## 【領域：教育】

(委員)

- ・ 小中学校の端末配置について、普及率とは別に使用率を調べてはどうか。どういう使い方をしているか聞いたところ、生活の授業の中で地図を見るといったものであった。今の子は物心ついたときから、そうした端末を使いこなしている。もっと使わせてあげて、デジタルリテラシーを上げて、AI や DX の先進県になってもらいたい。
- ・ リスキリングやリカレント教育以外に、専門学校でも求職支援活動として事業を行っている。以前と比べ、最近では、単にワードやエクセルを学ぶのではなく、情報処理プログラムコースなどで学ぼうと思う人が来ている。2年間のカリキュラムを終えずに再就職できたら飛び立っていく。こうした動きを見ることが他の学生にも刺激になる。ハローワークからの紹介で来られるのでこちらから開拓できないが、そういうのも伸ばしてはどうか。

(委員)

- ・ 地域の公立中学校のレベルが低いと、私立学校に行きたいとなり、そうすると塾に通う、そうすると親が仕事を辞めたり、働き方を制限するようになってしまう。公立中学校のレベルを底上げすることは非常に重要だと思っている。また、公立中学校から高校へ進む時に、内申が大事になると思うが、選択肢として選びにくさに繋がっているのではないか。中学校までのびのびと楽しくレベルの高い教育を受けることができ、そこからどこへでも行けるという環境の整備は公の仕事だと思うので、そこは何とかしてもらいたいと思っている。
- ・ 私立学校では必ず教育に関するビジョンがあるが、公立学校にはそういうものがなく、掲げているのは元気で明るく優しい子とかである。子供をどのように育てるかというビジョンや、ユニークで面白い教育をするというところに引き上げていくことが必要である。ただ、教員だけで改革するのは難しく、もっと様々な人が入っていかないとできない。小学校・保育園まではいいが、パブリックでいい学校があると、子育てする街として認識される。アメリカの都市では、公立小中のレベルが高いと家賃上がる、荒れていると下がる。(公立小中のレベルを上げることは) 担保すべき政策ではないか。

(委員)

- ・ 広島は教育に突き抜けて欲しい。県立広島などユニークな学校もあると思う。学費が安くて充実した教育受けられるのは魅力的であり、子育ての余裕が生まれるので、突き抜けてもらいたい。
- ・ 不登校の子たちがのびのび生活できる地域になるといい。不登校問題で移住を考える世帯は多く、県がこれまで頑張っているポイントであり、そこをもっと頑張ってアピールしてもらえると、とてもプラスになるのではないか。
- ・ 目標値の話であるが、大学進学時転出超過数ゼロという目標は本当にゼロが良いのか。アクセルとブレーキを同時に踏んでいる感じにならないか。大学は世界も含めて羽ばたけ、そして必ず帰って来るんだというほうが、広島らしいのではないか。

(委員)

- ・ 中学校に関しては、先生方も大変だが、部活の問題もある。民間に委託するのかといった議

論もあるが、やらなければ、子供にとって部活がつまらないとか、やることない、となり、そういうところが公立中学校に特色がないというところにつながってくる。子供目線で選択肢がたくさんあると良い。やりたいことが中学時代に出来たら高校は自動的に選択できる。

- 高校については、特色ある高校が増えると、県の元気につながる。佐伯高校の授業をフォローしているが、探求の授業に力を入れているのが佐伯高校の特色で、1年生の時から好きなことは何かという課題を与えて、3年間で好きなことの結果を出させる。この1年間で幼稚園から地域のことを考えようということが始まり、小・中、すべての探求の授業が高校の派生で動いていて、みんなが小学生の頃から好きなことは何だろうか、自分の地域のことをしてみようという授業が動き始めていて、小中高の校長先生が連携している。佐伯高校に入り、高校卒業時に小学校からやってきた好きなことが1つ成果を出せるといいねというのを地域で応援しようというのが、今授業として成り立っていて、その取組はすごく良くて、面白いと思っている。小規模校だからできることで、それが色々な地域で派生していけば良いと思う。
- フリースクールに関して、高校に限らず小・中学校に行けないから山間部に来たという御家族は多いと感じる。そういった方は、どうすれば子供が子供らしく過ごせるかを探している。私の地域では、学校に行っていない子がお店にいても、近所のおじいちゃんおばあちゃんが相手をするような、だれも怒らない地域になっている。学業レベルの向上と逆行しているかもしれないが、子供らしく暮らすという目線では、そういう緩い学校やフリースクールの強化というか、民間でフリースクールをやりたいという人たちも一定数、山間部には来られるので、それぞれの家庭開放のような、おうち開放で子供たちを育ててみようというところに光が当たると色々な子育てができるのかなと感じる。

(委員)

- 地方では公立学校への魅力がなくなっているという流れがあると感じる。カリキュラムが新しくなってどんどん入って来ているが、教員の時間がないと、そういった教育も組み立てることができない。子供と向き合う時間がとれているとか、そういう数値も評価できれば良いのではないか。また、企業や住民など外部ともっと連携して、多様な仕事があるというところの教育も大事だと思う。教員の業務改革については、DXを使って教員の業務を減らして、特色があって、ここに行けばこれをやれるといったような公立高校の強み出してもらいたい。

(委員)

- 起業家精神を涵養する取組で、いくつかの高校で講演などしているが、現場の先生方の話を聞くと、とまどっているようである。すごくたくさんのカリキュラムがあるので、例えば、地域課題を発見して商品開発をしようとか、新しいサービスを生もうというところがあるが、どう指導して良いかわからないということで悩まれている。我々のシェアオフィスなどインキュベーション施設に、小学校、中学校の先生方をインターンとして受け入れたりするが、先生方がそこまでやる必要があるのかとも感じている。
- 一方で、県の「遊びは学び」の取組はとても素晴らしいと思っているが、その後、小学校に入ったときに慣れなくてとまどうということを知ったことがあり、そういった部分は課題があるのではないかと感じている。

(事務局)

- ・ 幼保小連携でそのギャップを埋めるという施策をやっている。定量的にうまくいっているかどうかという説明できないが、課題解決につなげていきたい。

(委員)

- ・ 指標で「主体的な学び」の定着割合が非常に高いということに違和感がある。大学生を教えているが、主体的と思える学生はそんなに多くはない。主体的というのは難しく、こういうプログラムであれば良いということでもない。生き方としての主体性を身に付ける必要がある。
- ・ 目標について、大学進学の出超が620人という目標について、若者がどれだけ流入しているかも指標の一つになるのではないか。
- ・ 高等教育については、叡啓大学だけでなく、広がりが必要である。実際には取り組まれていると思うので、他の大学も含めて活性化しているビジョンが見えると良いと思う。

## 【領域：働き方改革・多様な主体の活躍】

(委員)

- ・ 女性や高齢者の労働参加は進んでいるが、労働時間数が少なく、日本全体で労働力が減っており、人手不足と言われている。女性に関しては、産めよ、育てよ、働けよ、そしてさらにもう1つ、昇進せよ、となっており、社会参加は歓迎されているが、子育てなど女性に全部負荷が来ている環境となっている。女性が働きたくても子育てをしていると時間がとられてしまう。そのため、正社員だけにこだわらず、スポットバイト、ギグワークなどを、企業が柔軟にできるようなシステムを、できれば、広島発で広島県がつくっていただきたい。企業のDXを推進していくことで、人を介さなくてもいいものを先進的に取り入れていただきたい。

(委員)

- ・ 女性の働きやすさというのは、早く帰れるだけではだめで、早く帰るから昇進しなくても当たり前、早く帰るから評価をされなくて当たり前と、そっち（家事育児）を全部女性がやっているのであれば意味がない。家事育児責任を主体的にやっている女性が早く帰れることが大事ではなくて、誰もが早く帰れるとか誰もがどのような理由であっても早く帰れたり休めるというのが大事である。ギグワークやパートタイムやフリーランスとして働くというのが女性の選択肢となるのは良いが、それが女性の働き方だとすると新たな差別になる。例えば、地域限定の総合職が女性の仕事だと思われる。そうすると、地域限定の総合職の女性は、男性よりも評価が低く、給料が低くなる。人的資本経営を実際に情報開示しているところをみると、男女の賃金格差はすごく大きい。「えるぼし」や「くるみん」認定企業でも賃金格差が男性100に対して女性40というところも沢山ある。そんな状況で女性が楽しんで頑張っている仕事を続けたいと思いつながるわけがない。そこは強力で是正していく必要があると思う。また、同程度に、男性もそっち側の仕事を選べていない。これは男性にも男性ならではの様々なプレッシャーがあり、選択できない状況もある。男性と女性は無関係なんだという状態の中で、それぞれの職種を男性も女性も選べるようにならない限り、働きやすさは実現できていない。男性は長く働けるけれども、女性は早く帰れるという会社でも女性が活躍しないというのは、2004年頃からやっているダイバーシティ経営の結果である。男性女性関係なく、みんなが自分の好きな形の働き方ができる。その時大事なのはいかにデジタルを活用できるかが重要である。
- ・ 2027年にはAGI (Artificial General Intelligence) が実現されると言われているが、それは、人と同じように、課題を切り分けてAIに渡すのではなくて、「今からこれをすれば良い」とAGIが自分で考えて働けるようになるという世の中である。そんなときに、誰もAIを使っていないとか、人間最適のビジネスプロセスの中で、どこをAIに任せられるかを考えているだけでは足りない。それは多くのAIの研究者が言っている。これは大企業ほど変わりづらいが、逆に言うと、中小企業やベンチャーはすぐにその状態に適應できるはずである。そうなれば絶対に人手不足ではなくなるはずで、そのつもりでビジネスプロセスを変革させる指導が必要になってくるし、そのための設備投資をいかに助成していくかということが大事である。それが働き方改革にもつながる。AGIの世の中では、どんな人もやりたくない仕事はやらなくて済むような時代が来るはず。ユートピア的な考え方ではあるが、その時代に向けて、人手不足で定型ワークをする人材がたくさん欲しいと言っている会社は、早めに関わってもらい必要があるので、教育や指導が必要だと感じている。

(委員)

- ・ 人的資本経営とは結局、一人一人の能力を最大限発揮できていることではないかと思っている。女性がサポート業務を中心に従事し続けることは年齢にそぐわない能力発揮を組織として容認していることであり、非常に問題であると思う。それを変革するためにはDXが必要。女性を事務仕事から解放するというをやっていかないと、入社30年目でも5年目と変わらない仕事をしているということになりかねず、人的資本経営の観点からすれば相当アウトである。女性が年齢に見合った成長をし続けるためにも家庭や会社においても役割分担もなしにする世界が理想的であり、それを地域のモデルとしていけるかということに労力をかけていくべきである。
- ・ 長時間労働と転勤がボトルネックとなっている。カーボンニュートラルにもつながるが、18時以降勤務がない会社を優遇するなど、企業だけの力だけではどうにもならないところを支援していくことなどが考えられるのではないかな。
- ・ 転勤についても、男性が転勤すると女性もついていくことになるので、例えば、転勤システムをなくして地域採用を男女ともにちゃんとやっていくことを促進してはどうか。広島だったら男性、女性、仕事も関係なく、家庭内の男女の役割分担もない。そういうモデルを広島発でできたら良い。こういうモデルができていく地域はあまりないと思っている。徹底的に役割分担ゼロの社会を提案したい。

(委員)

- ・ (就労継続の) A型、B型支援の施設が増えていて、そこに行ける人たちが増えているというのも事実であるが、そこに行けない人にも目を向けていただきたい。そういった人たちは色々な事情があり、仕事をしたくないわけではなく、世の中に居場所を求めているわけで、そういう人たちが働ける場やシステムなど、フォローできるものが必要ではないかと思っている。生きがいになる働き方の支援になれば良いと思っている。

(委員)

- ・ 外国人に選んでもらうとあるが、選ばれる広島になるための施策をしてもらいたい。高度人材だけでなく、例えば介護など働き手が不足している業種に特化したテーマで、外国人をターゲットした専門校を作るなどが考えられるのではないかな。

(委員長)

- ・ 外国人も高度人材か技能実習系かで区分けが必要である。実習生は広島に多いが、今後は円安が続けば、技能実習も来てもらえない可能性がある。
- ・ 研究開発やものづくりの高度化等で、たくさん呼べるような仕組みがあったら良いと思う。
- ・ KPIで、20~24歳の転出者数が減っているとあったが、分母である20~24歳の人口は2021年から2023年にかけて3千人減少している。このため転出者も減っていると言える。これを率にすると2.2%から1.9%まで低下しており、ある面、頑張っているのではないかなと言える。このように1つの指標でも実数と率それぞれで見ていく必要がある。
- ・ 一方で、実数で減っているのは問題で、10年前の10~14歳の人口と10年後の今の20~24歳の人口を比較すると、7,000人以上減少している。特に深刻なのが女性であり、4,600人程の

減少となっている。同じ期間、福岡県は11,000人の増で、うち女性が8,500人の増で、対照的となっている。やはり女性の流出は20～24歳が多く、同じ年齢集団の人が実数としても減っているということが、深刻な問題だろうと思う。

(委員)

- KPI を実数だけ見るのはミスリードとなる可能性がある。意味のある目標値を立てていただきたい。
- 6月17日の「クローズアップ現代」で、干渉されない都会へ女性が出て行くという内容の放送があった。女性はこうあるべきという押しつけが社会にあり、広島県も例外ではないと思う。これはダイバーシティ経営で重要なことで、人は人、自分は自分、(と考えずに)隣の人が自分と同じであってほしい、同じように苦勞して、同じように仕事するべき、と言っている間は、ダイバーシティ経営はできない。暮らしの中において外国人を忌避する感覚ともセットになるが、私と同じような暮らしをしていない人たちを何となく仲間として思えないという感覚。このような感覚を払拭することは難しいが、払拭するためには、自分も多文化の中で1度生きてみて、隣の人が我が家と違うことを受け入れることが大事である。その感覚を高める取組を小中高校大学などでやっていただきたい。そうでないと多様性を受け入れる社会にはならない。

(委員)

- 多様性は、私の考えの中にも根底にあって、同意見である。これからの時代、いかに自分の意見を持つか、ということや、多様な意見をアクセプトして、そこから協議して落としどころをつくっていったり、自分で納得したり、人に理解してもらうことが非常に重要である。女性の活躍や外国人の受け入れ、障害者や高齢者、多様な中で経験をすることが必要である。若い人はSNSを使うが、自分の世界だけで満足して、やっぱり自分は正しいという確信だけを得るのは危険であり、これから多様な人たちと生きていくというのが大事だと思っている。働き方改革の中で女性の活躍促進については2行しか記載がないのは広島県として力を入れていないのかと思ってしまう。指標も、女性が活躍している指標として、もっと違う視点の指標もいれていただきたい。

## 【領域：産業イノベーション】

(委員)

- ・ スタートアップ支援については、素晴らしい取組であると思っている。民間のひろしまイノベーションベースでは、広島県出身の上場企業の創業者が広島県に恩返しをするために起業家支援などをやられている。広島県のスタートアップ支援の中では、ユニコーン10の候補に入る手前のところの支援が手薄ではないかを感じる。ユニコーン10の候補に入る企業に至るまでの、その候補の手前のところの起業家支援を民間では少しやり始めている。ひろしま産業振興機構が、創業後5年未満もしくは創業前の入口部分の機運醸成を行っているので、5年以上の売上1億円から10億円くらいの企業をもっとスケールアップさせるような、機運醸成の支援があれば良いと感じる。そうすることで、もっとユニコーン10の可能性が上がるのではないかな。
- ・ できるわけがないと思っている人への意識改革が必要である。

(委員)

- ・ 今後間違いなく規制が増えていくと思うが、カーボンニュートラルについては、当社も含めてまだまだできていないので、イノベーションやこれからの可能性が見出せるのではないかな。広島県は海も山も農地もあり、ブルーカーボンなど色々な可能性があるがまだまだ開拓しきれていないのではないかなと思う。
- ・ 広島の特徴として、採用活動する中で、地域が好きという学生がたくさんいる。地域課題解決というキーワードの中に「イノベーション」を入れて、そこに環境問題解決が入ってくると、ひろしまらしいイノベーションとなり、そういったところに活路があるのではないかと希望として思っている。

(委員)

- ・ ユニコーン10については県内で生み出すのも大事だが、県内企業にこだわってはいは、実現可能性が低く、可能性ある企業を誘致ということに真剣に取り組むべきではないかな。国内にはユニコーンを目指すベンチャーがたくさんある。その時にオフィスやネット環境、国内外へのアクセスしやすさ、財政的な融資の受けやすさなど、広島だとビジネスしやすいと思える環境が必要。広島県でビジネスすることがお得で、すごく意味があると思っただけ何かを打ち出せないといけない。
- ・ 資料にはものづくりが基幹産業と書かれているが、ものづくりが基幹産業なのは47都道府県全て同じである。競争力ある企業が数社あるというくらいでは県の特徴とまでは言い難い。ものづくりが1番と言っている間は他の都道府県との差別化はできない。

(委員長)

- ・ 企業誘致もさることながら、人に選んでもらう、来てもらう、サンドボックスなどで新しい産業を作ろうということも大事だと思う。

(委員)

- ・ 基本に立ち返るが、安心・誇り・挑戦の「誇り」というのは郷土愛のことだと思っている。全ての取組に共通するが、広島県民が何かしたいというのを助けるためにということだと思う。愛をもって接していきたいと思う。

(委員)

- ・ ユニコーン10を一から作り上げるのは難しいということは共感する。こうした取組をやりつつも早く効果が出るもの呼んでくることは必要である。一方で、挑戦することが当たり前という土壌を作るとはすごく難しい。社会を良くしたいという学生が集まっているにも関わらず、起業したいという学生は非常に少ない。挑戦する人たちと、ともに過ごすことの経験を通じて、2番目に挑戦することを考えさせないと挑戦する風土は育たない。まずは、挑戦する人を連れてきて、挑戦することが素晴らしいということを経験してもらう土壌を作っていくといけない。また、新しい産業を育てることは、人づくりや女性活躍、人口流出にも関わってくる。関東方面に行く人は、広島でやりたい仕事がない、車は好きじゃない、もっと第3次産業的な仕事がしたいという人が多い。様々な産業が育っていることが女性流出の歯止めになるのではないか。

(委員)

- ・ ユニコーン企業を広島で育てるのが難しいということは我々も感じているが、そこを目指す人たちを作ることがとても重要であり、取組自体は間違っていないと思う。それがあからみんな目指そうという思いにつながっている。
- ・ インドのベンチャー企業が広島を拠点に愛知だったり色々な所に営業して、仕事を獲得しており、そういう人たちと関わるのが起業家たちの刺激になっている。

(委員)

- ・ 県外への人口流出については、やりたことがないことに尽きる。そのために自分でやりたいことを創る、そのために創業支援をする。そうした小さい芽を拾ってあげることがたくさんあれば良い。創業の時には夢物語のことも多いと思うが、広島ならその夢を発言しやすい、実現できる土壌がある、広島に行ったらフォローしてくれる大人が沢山いる、そういう空気感があれば、広島に行ってやってみたいということにつながり、色々なことに挑戦できる環境ができるのではないか。

(委員長)

- ・ イノベーションハブやサンドボックスなど非常に面白い取組だと思うが、こういう取組があまり知られていない。一般県民、学生、退職者など挑戦したい人に、幅広く知ってもらって参加してもらう機会が必要だと思う。
- ・ ビジョン指標である付加価値額が伸びたという表現がある。実数でも一人当たりでも。確かにそうだが、注意したいのが、この3年間でマツダの売上額は2.9兆円から3.8兆円になり、営業利益も2桁から4桁に上がっている。しかし、生産台数は減っている。要は円安の影響により、見かけの付加価値が上がってきただけで、本体とその周辺だけは見かけの帳簿上の数値

がよくなって、実際にもものは生まれていないという問題がある。

- 銀行の指標で預貸率というのがあり、広島は名古屋と並んで預貸率が高い地域であったが、最近は他の地域と変わらなくなっている。うまく地域でお金をまわす仕組みが必要ではないか。地域の金融機関一体となって新しい企業を作っていく、そういう雰囲気を作っていただきたい。

(委員)

- 産業イノベーション分野に関して広島は良い取組をしていると思う。将来的に、AI についてどのような教育をして強化していくかが重要である。今の大学生を見ていると、先を見ている学生は自分から外にいて、色んなプログラミングとか、研修を受けている。大学等のカリキュラムに入れていくなど、大学生など若い人たちの人材育成として、リスキリングの前からやっていく必要があるのではないか。

## 【全体】

### (委員)

- ・ 様々テーマで個別に切るのではなく、トータルでどう良くしていくかを考える必要がある。
- ・ イノベーションの取組を考える時、どうしても若い人をターゲットにして挑戦を後押しという話になるが、知見、経験値、スキルを持ち、お金もある中高年のチャレンジを促す必要があると思う。若い人だけにリスクを取らせるのではなく、若者人口も減っていることから、中高年の挑戦を引き出すのが大事ではないか。
- ・ 人口減少が進み、基本的には国全体では完全雇用が実現できると言える。これまで多くの中小零細企業は、雇用の受け皿として潰せないとしていたと思うが、これから先は生産性の低い会社は閉じていくということを真剣に考える必要がある。合併や事業承継などであふれてしまう人への支援は必要だが、イノベーションに向けて人を動かしていく、そういう施策が必要ではないか。

### (委員)

- ・ そういった会社をばっさり切ってしまうと地銀も大きな影響を受け、金融が崩れると日本全部がダメになってしまうので。人的資本経営はすごく難しいと思うが、これからの重要なテーマであると考えている。

### (委員)

- ・ 私自身は、今は地域課題解決をビジネスにするというところに行きついて、地域の人を巻き込みながら、みんな生き生きと暮らしていただいていると思っている。生きがいや働き甲斐をみんなが感じ取れるような、そういう気概や人間らしさがフォーカスできれば良いと思う。

### (委員)

- ・ ワクワクする広島というのをどう描いていくか。広島ならどう生きられるのか、どうストーリーを描くのか。広島で学んで、県外・世界を経験して、もっといい広島にしたいという志をはぐくんで、広島に戻ってくる。そういう循環ができるリソースは絶対にあると思う。リソースを最大限生かしながら、ワクワクする広島というストーリーを描くため、それを補足する施策について、ビジョンの見直しの中に盛り込まれると非常に面白いのではないかと。

### (委員)

- ・ 広島と言えば「共育て」というようなキャッチコピーがあると良いのではないかと。行政としては満遍なく行き渡らせることも大事だと思うが、何に特化するか、旗を掲げることは大事だと思う。

### (委員)

- ・ 広島を良くしようという意見が出ることはそのこと自体が大きな資産であり、力がある街だと思っている。メッセージをしっかりと出すことが大事で、出せば批判もされるが、勇気をもって発信する自治体であってほしい。

(委員)

- ・ 領域ごとのフォローアップも大事であるが、全部に繋がっている部分もたくさんあると思う。第5回でのまとめの中で、どこを広島として強く打ち出していくのかということになると思う。

(委員長)

- ・ 領域はあくまで便宜上のことであり、本日も領域超えた部分もあったと思う。第5回小委員会のフォローアップのまとめに向けて委員の皆様と作り上げていきたい。

## 7 会議の資料名一覧

資料1 「安心▷誇り▷挑戦ひろしまビジョン」見直しスケジュール

資料2 これまでの主な取組と成果（抜粋版）

参考資料 これまでの主な取組と成果